

# 現代思想とモラロジーに 関する一考察

美 和 信 夫

## 目 次

- |                |                           |
|----------------|---------------------------|
| (1) はじめに       | (3) 世界諸聖人の思想と道徳の<br>現代的意義 |
| (2) 現代思想とモラロジー |                           |

### (1) はじめに

法学博士広池千九郎は、その後半生を道徳の研究と実践に傾注した。そして昭和3年（1929年、62才）に、『新科学としてのモラロジーを確立する為の最初の試みとしての道徳科学の論文』（全4冊）を公刊し、道徳に関する新しい科学的研究の分野を切り開いたとして、その研究内容をモラロジー（道徳科学）という名称で発表した。

広池千九郎は、モラロジーにおいて、一方では、近代の文明、学問、思想などの成果を吸収しながらも、他方では、近代社会のあり方を厳しく批判し、新たに提示した「最高道徳」の実践を根幹にして、一人ひとりの人間の

生き方を大きく転換するよう呼びかけている。

本小論は、道徳に関する現代思想の動向と対比しながら、広池千九郎の提唱したモラロジーの特色とその意義の一端を考察することを目的としている。しかしながら、現代思想およびモラロジーに関する筆者の理解が浅いため、本小論は、今後筆者がモラロジー研究をすすめていくためへの一試論と考えている。

## (2) 現代思想とモラロジー

広池千九郎は、従来の人間の生き方、社会のあり方に根本的な欠陥があり、今後世界の平和と人類の幸福のためには、よりよき道徳の原理、すなわち普遍的な道徳の原理を見出ししていくことが最も大きな課題であるとした。そして広池千九郎のいうモラロジー研究の目的はまさにこの課題の究明にあった。

本節では、現代思想の動向を概観し、従来の人間の生き方、社会のあり方の諸問題を、それらがどう解決しようとしているのかをさぐりながら、広池千九郎の提唱したモラロジーが課題とする普遍的道徳の原理を探求するための手がかりとしよう。

はじめに現代思想の根底に流れている人間観の特色からみていく。ルネサンスと宗教改革で始まった近代社会は、封建社会の束縛やキリスト教教会の権威から個人個人を解放し、人間一人ひとりの尊厳や個人の内面的自覚を強調するとともに、人間の持っている理性に絶対の信頼をおくことになった。それは一口には人間中心主義ともいわれ、人間の持つ能力への信頼、一人ひとりの良心への信頼を基調とする人間観であった。そしてこの人間観にもとづいて、近代社会は、旧来の不合理な道徳・慣習・制度を打破しつつ、科学技術の発達を促し、今日に至るすぐれた文明を作りあげてきた。

だが反面では、こうして生まれた近代社会、物質文明が人々を幸福にし、人間性を豊かにしたとは必ずしも言えない状況を呈している。人々は相変ら

ずさまざまな人生問題、社会問題に悩まされ続けている。また近年人間疎外、生きがいの喪失など新たな問題も生起している。さらに人間は、世界大戦という大悲惨事を避けることができなかつたのである。今後も人間は戦争という悲惨事を回避できるという保証はどこにもない。しかも人間は、その本質において利己的な面を強く持っており、どうしても自己本位の生き方になりがちである。それが物質文明と結びついて、人々の生活に弊害をおこしていることも明らかになってきた。

だから、もはや現代の人間は、みずからを特別な理性的存在とみることも、一人ひとりの良心に全幅の信頼をおくことも許されなくなっている。つまり近代社会、近代文明を支えてきた人間観そのものから再検討してみる必要に迫られているのである。

そこで現代は、あらためて「人間とは何か」という人間の本質への問いに始まり、真に人間性を豊かにし、世界の平和と人類の幸福への確かな道、近代文明のすぐれた面を今後人類にとって真に有用なものとしていくためのあり方を模索しているといえよう。

こうした近代文明の行きづまりを打開しようとする現代の思想・運動を代表するものとして、社会主義、実存主義、プラグマチズム、ヒューマニズム、国際連合とユネスコの活動などが注目される。以下では、人間の生き方、社会のあり方に対するそれらの提言を概観しながら、モラロジーのめざす普遍的道徳原理の探究のためへの意義と問題点を考えることにする。

社会主義は、生産手段の私有をなくして公有とし、貧富の差による階級の対立を除去して、人間の完全な自由と実質的平等を実現する理想の社会をめざす思想や運動である。この社会主義の立場からは、近代社会のあらゆる欠陥が資本主義体制に起因するとみる。すなわち資本主義体制こそが、人間の労働力をも商品化して人間性喪失の状態においたり、貧富の差など社会的矛盾の増大をおこしたりする要因だとみる。そこで資本主義制度から社会主義制度への変革を行なって、人間性を回復し、社会のあらゆる矛盾を解決することをめざしている。

社会主義の思想・運動は、今日先進資本主義国家にも大きな影響を与えている。例えば、資本主義国家でも、自由競争による弊害の是正、社会保障制度の推進など、制度・法律の面から資本主義の欠点を改善する努力がすすめられている。

しかし逆に、今日マルクス流の社会主義を実現した国家において、かえって人間性が圧迫されたり、個人の主体性が抑圧されたりするという傾向がみられる。また急激で革命的な社会変革により、かえって多くの人々を不幸にする事態も起こっている。

社会主義によらなくても、現代社会改革の方法として、法律・制度の改善に目が向けられることは当然である。しかしそのみでは、国家・社会の安定や個人個人の幸福は現出せず、よりよい法律・制度であればあるほど、並行してそれを支える人々の人格性・道徳性が重要となる。モラロジーはこの点に着目して、どのような政治制度・社会制度をとろうとも、道徳を根本としないならば、人類の幸福は実現しないとみる。

次に実存主義は、近現代の人間性の危機を、個人の自覚と反省によって克服しようとする思想である。すなわち現代人は、巨大な組織と驚異的な科学技術の発達、それによる物質文明の中で、どうしても自分というものを見失いがちである。そこで実存主義は、本来の自分とは何か、自分は何のために生きているのか、人間の真実のあり方とはどういうものかなどについて問いただし、深く人間の内面にまで立ちかえって、自己のあり方を反省してやることを呼びかけている。そして現代における人間疎外を、本来の自己を取りもどし、一人ひとりの主体性の確立によって克服していこうとする。

実存主義は、人間一人ひとりが他にかたがえのない独自の存在であることを、あらためて自覚させた。その上人間というものが、本来主体性をもって自分自身の生き方を計画・選択し、そしてその生き方に責任を負うべき存在だということを、再認識させた点で大きな意義をもっている。

他方一人ひとりが個人の主体的立場を崩すことなく社会的要請にどう答えしていくのか、すなわち個人性と社会性、主体性と連帯性をどう調和してい

くのか大きな課題となっている。また個人の主体性重視は、ともすれば極端な主観性の中に閉じこもり、自己中心の独善性に陥りかねない。それだけにモラロジーでは、自己のあり方が普遍的価値を持つかどうかを、人類の生み出した英智である古代の先哲（聖人）の生き方・思想、それに現代の学問の成果とに照らしながら、絶えず反省してみる必要性を提唱している。

次にプラグマチズムは、経験にもとづかない合理主義とか観念論とかの考え方をしりぞけ、その思想が真理を含んでいるかどうかは、それが人間の生活や行動に役立ったかどうか、実際の結果によって決定されるとする。

デューイは、こうした科学的な考え方を、道徳の問題についても適用する。すなわち、人間の行為を正しく導き、その結果として人々の幸福がもたらされるような事柄が善となるのであり、「何が善であるか」を論ずるよりも、「どうしたら善を実現できるか」を問題にする。これは道徳問題を哲学的考察にとどめず、科学的に考察しようとする点で注目される。

しかしデューイが善というものは一定不変の内容をもつものではないし、絶対的なものでもない。それは相対的なものにすぎないとした点は、どうであろうか。例えば、イエス・キリストの「愛」、釈迦の「慈悲」、孔子の「仁」<sup>(1)</sup>などの中に、人間の生き方についての共通普遍的な原理が認められよう。従って道徳の場合も、個々の行為の現われ方は相対的であっても、その背後には普遍的絶対的ともいふべき原理が考えられる。そこで今後、道徳の問題も、個々の事例を通して、その根底における道徳的法則を探求し、普遍的な道徳原理を見い出していくという科学研究をすすめるべきであろう。モラロジーはこの課題にも取りくんでいる。

次に現代のヒューマニズムをみてみよう。ヒューマニズムは、一般に人間尊重、人間解放を基調とする思想・態度をいう。従ってすぐれた思想はすべてヒューマニズムを根底としている。

現代ヒューマニズムの特色を、それを代表するといわれるシュバイツァーを通して見てみよう。シュバイツァーは、自己の生命のみでなく、他のあらゆる生命をいとおしみ、愛し育てることが、倫理の基本であるとする。そし

て人類が偏狭な民族主義や、他の生きものに対する横暴から目ざめて、あらゆる生命への共感の心を持つとき、諸国民は信頼関係で結ばれ、人間は非人間的な罪から解放されて、本来の人間性を取りもどすことができるとしている。

シュバイツァーをはじめ現代ヒューマニストに共通する特色は、戦争の防止と世界平和の実現を願い、国家・民族・人種・階級などの閉ざされた集団の枠にとらわれずに、あらゆる立場の人々への愛に徹していることである。しかもそれが人類社会のために奉仕する献身的な実践行動となって現われている。そこには自己利益を中心にした生き方ではなく、人類の共存共栄のためには自己犠牲を払って生きることの尊さを人々に教えている。

第二次世界大戦後、国際平和のための機関として国際連合が成立し、そのもとにユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が創設された。それらの憲章では、「国際社会の平和と安全の維持」「国際平和と人類の共通の福祉」を強く訴えている。これは二度にわたる世界大戦の惨状から生まれた、現代人類共通の願いである。しかし現実には、これによって国際平和が実現しているとは言いがたい。その後もしばしば国際紛争が起っている。

そこで人類の平和実現の原点として、今一度ユネスコ憲章にある「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という一節を思い起し、世界の一人ひとりがその心に「平和のとりで」を体得し実践して行くことから始めるべきであろう。

モラロジーの課題とする普遍的道德（モラロジーではそれを「最高道德」という）は、単なる慣習的・形式的道德にとどまらないで、まずみずからの精神作用と行為がどうあるべきかという、みずからの主体性のあり方を問題とし、その規準を古聖人の生き方・思想に求めている。そしてモラロジーはそこに共通してみられる道德の原理を、現代の学問・思想の成果に照らして体系化し、それを実践するための具体的指針を示すことをめざしている。それにより道德が人間の生きていくための条件となり、人間らしく成長・発展する規準となり、よりよき政治・経済・社会の構成原理として国際平和を築

く基盤となるのである。そして道德は、人間が意義ある人生を送るとともに、平和な社会を築くために不可欠の要素となるのである。

### (3) 世界諸聖人の思想と道德の現代的意義

前節において、現代思想の意義と問題点をふまえた上で、今後の普遍的な道德原理のよりどころとして、モラロジーが世界諸聖人（先哲）の生き方・思想に着目していることを示唆してきた。そこで本節では、世界諸聖人の思想と道德にみられる特色とその現代的意義を考察することにしよう。

20世紀ドイツの代表的な哲学者のひとりであったヤスパーズは、その著『歴史の起源と目標』（1949年）の中で、人類の思想の歴史には、いわば「枢軸時代」（思索活動の中心）とも言うべきものがあって述べている。すなわち、紀元前5世紀ごろを中心に、洋の東西にはからずもほぼ時期を一にして、すぐれた思想家たちが歴史の舞台に登場して、人類の偉大な教訓を与え、世界歴史はそれを軸として回転したというのである。すなわち西欧の人間哲学ないし倫理学の開祖とされる古代ギリシャのソクラテスの登場は紀元前5世紀であったし、続いてその弟子のプラトンが師の思想を継承・発展させて、以後の西欧哲学の伝統を形成した。また、その後中東のパレスチナ地方にイエスが出て、キリスト教の人類愛を説いた。そして東洋でもこれと前後して、インドのゴータマが生まれ、仏教による人間の大きな悟りの道を示した。また、中国には孔子が現われて、人間の踏み行なうべき基本的な道を教示した。

このようにして、人類の思想の偉大な歴史は、この時期に世界でいうせいに幕を開いたのである。その後人類は、新しい歴史を切り開くに際して、つねにこれら人類の教師とか先哲とか呼ばれている人達の生き方・思想に立ち返り、人間や社会の基本的あり方を反省し、新しい出発点としてきた。

そこで現代社会・現代思想の課題を止揚して、新しい普遍的な道德原理を見出すためには、やはりこれら諸聖人の生き方・思想が大きな規準を与え

てくれる。すなわち、これら諸聖人の生き方・思想は、それぞれ特定の時代、特定の社会において生まれたものであるが、時代や社会のへだたりを越えて、われわれの心に強く訴える普遍的価値をもっているのである。

現代人が生きがいを見い出せないとか、何が人間らしいことか分からないとかいうことは、この地球上に生存し、社会生活している自分が、最後のよりどころをどこにも得られないということである。けっして変ることのない価値をもったもの、不動の真理と善を示すようなものが、何も認められないということである。その意味で、人間にとって最後のよりどころとなるものは何かという問題は、人間存在の原点にかかわる問題であって、イエス・キリスト、ソクラテス、釈迦、孔子が、いずれも生涯をかけて解決を求めたものである。その高度な精神的自覚とたゆまざる実践の中から生まれた思想・道徳だからこそ、歴史の移り変わりの中で現代に至るまで、人々に呼びかける力をもっているのである。

モラロジーでは、人類の生存・発達・安心・平和・幸福のために不可欠である普遍的な道徳原理を、これら諸聖人の生き方・思想に共通一貫するところに求め、その内容の体系化と現代社会における必要性の実証的研究をめざしている。

ところで近代社会は西洋中心に展開してきた。しかし現代ではそれに対する反省がみられ、東洋と西洋の違いを越えた東西文化の融合・補完が強く求められている。その場合、両文化を接木して新文化を作り出せばよいのではない。西洋は西洋の、東洋は東洋の、それぞれの考え方の源流である諸聖人の思想に立ちもどって、問題を根源的に考え直すべきであろう。モラロジーはそれぞれの思想・文化の源流である聖人に共通一貫してみられるものこそが、東西文化の違いやその後の宗教的不寛容さを止揚し、真に人類共通の普遍的原理となりうるものとする。

そこで四聖人の生き方・思想に共通一貫する点として、倫理学者からも指摘され、またモラロジーでも特に注目している次の三点をあげておこう。

第一は、四聖人とも民族・人種・階級などを越えた人間愛に徹していた点

である。現代のすぐれた思想は、いずれもヒューマニズムを底流としているが、ヒューマニズムは、西洋ではすでにソクラテスに代表される古代ギリシア思想やイエス・キリストの思想の中に強くみられる。また東洋でも古代中国における孔子の「仁」という考えは、人と人とお互いに親しみ合うことであった。また古代インドに生まれた仏教も他人を愛し、他人に奉仕することを説いたのである。この点について、例えばイギリスの哲学者ラッセルは、愛の精神を説いたという点で、東洋のゴータマ・ブッダと西洋のキリストには共通一貫するものがあると述べている<sup>(2)</sup>。

第二は、四聖人とも、宇宙自然界と人間とのつながりをはじめとする人間生存の原点を、その根源にあって永遠に生き生きと働いている力、すなわち神的なものとのかかわりから考えていた点である。つまり人間の生き方の基盤を、人間を越える根源的なものとの交わりの中に求め、そこから人類の平和・幸福の原理を見いだそうとしていたのである。

第三は、四聖人ともみずから率先して人々に奉仕する人生を歩み続けた点である。そしてその精神的深さと人格的感化力の偉大さによって、時代や民族を越えて世界の人々に大きな影響を与え、絶えず人間の生き方や社会のあり方の普遍的な規準となってきたのである。アメリカの社会学者P・A・ソローキンは、聖人・聖者の研究を行ない、『利他愛——善き隣人と聖者の研究——』（1950年）などで、非利己的・創造的愛の研究を社会学的方法によって進めた。そしてソローキンは次のように述べている。聖人（四聖人のみではない）といわれる人々は人心を一新し、文化と社会組織を改造し、歴史の方向を決定的に条件づけた。すなわち、富も権力もない聖人達こそが最も人類に影響を与えてきたのである。そして現代の混乱期においても、人類に永遠の平和をもたらすためには、どうしても古代諸聖人のごとき愛や慈悲をもった聖者が、一人でも二人でも多くなっていくことが大切であり、それによって新たな道徳的秩序が建設されると説いているのである<sup>(3)</sup>。

上記三点を含む、古代諸聖人に共通一貫する道徳原理の体系化は、モラロジーを提唱した広池九郎が初めて試みたものであり、その内容を「最高

道徳」として提示したのである。

次に近代の歴史は、科学の有効性を実証し、物事を科学的・合理的に考え、問題を解決することの大切さをわれわれに教えてきた。そこで諸聖人に共通一貫する普遍的な道徳原理を、真に権威あるものとして示すためには、それを学問的体系として示すとともに、その人間社会における効果を科学的に実証し、その実行の必要性を示していくことが重要である。モラロジーはこの点をめざしている。

また現代文明を生みだした科学の一面として、戦争や公害など人間をかえって不幸にすることに結びつき、それが問題となっている。そこで従来の科学のあり方を反省し、人間生活の中に科学の成果を正しく位置づけていくためにも、やはり人間の生き方の原点となる聖人の思想との交わりが重要である。

次に人間の生活は、それぞれの自然的風土や歴史的伝統の中でいとなまれている。われわれの道徳も、それが現実生きて働くためには、広く世界に目を向けるとともに、われわれ自身の道徳的伝統をふまえることが大切である。そしてわれわれの道徳的伝統の中で、人類全体の道徳問題に対して何が寄与しうるのか、何が克服されるべきかを、世界のすぐれた道徳的伝統と比較しながら考えていくことが必要である。

我々日本人の道徳的伝統は、『古事記』『日本書紀』に述べられている神話の世界・思想が源流となっている。日本人はこの神話の思想を源流とし、それを軸としながらも仏教や儒教など外来のすぐれた思想を吸収し、日本人独自の思想を形成して、その精神生活を深めてきた。例えば和辻哲郎は、神話を通して第一に清さの価値の尊重、第二に人間の慈愛の尊重、第三に社会的正義の尊重という道徳思想を指摘し、このうち第一の清さの価値の尊重という道徳的伝統の影響を次のように述べている。すなわち、清さの価値の尊重は、その後律令時代の政治において「正直」として自覚されてきたのみならず、さらに戦国時代を頂点とする武士達の気節をたっとび廉恥を重んずる貴い道徳としても華を開いた。そしてそれは江戸時代に至って儒教道徳の理

解の道を開き、君子の理想と武士の道との密接な結合を導き出し、さらにまた町人の間にさえも、「正直」を生活の原理とする道徳思想を生みだすに至ったというのである。<sup>(4)</sup>

ところで神話の世界は、宗教的には主として神道という形で継承されてきている。それを代表するものの一つが皇祖神天照大神を祭る伊勢神宮である。昭和42年(1967)来日したイギリスの歴史家トインビーは、4時間にわたる伊勢神宮の参拝と見学のあと、神楽殿において、求められるままに毛筆で次のごとく記帳している。<sup>(5)</sup>

Here, in this holy place,  
I feel the underlying unity  
of all religions.

Arnold Toynbee  
29 November, 1967

「この聖地において、私は、あらゆる  
宗教の根底的な統一性を感得する。

アーノルド・トインビー  
1967年11月29日」

三十数年来、世界の主要な宗教や文明を比較研究したトインビーは、神道的なものの中にあらゆる宗教の根底的な「統一性」を感じ取ったというのである。すなわち、トインビーが神話以来の日本の伝統の中に普遍的価値を認識したことは、注目される。

また神話の世界・神話の思想は、日本の皇室の伝統として継承されている。歴代天皇は、神話の中で最も偉大で最も尊い皇祖神天照大神の子孫として、その精神を継承していくことが最も大事として強く自覚されている。明治天皇の次の御製は、その一つの事例である。

神風の伊勢の宮居のことをまつ  
今年もものの始にぞきく<sup>(6)</sup>

ところで和辻哲郎が、日本人の道徳思想の根幹として注目したのは尊皇思想である。和辻は、尊皇思想こそが日本道徳思想の根幹であり、他のあらゆる道徳思想はこれから派生しているとする。すなわち和辻によれば、前述した神話に現われている3つの道徳思想の場合も、尊皇の道を通して理解され

たという。従って尊皇の道は、日本の道徳思想のいっさいが流れでる淵源であるというのである。<sup>(7)</sup>

上記の見解から、神話の思想を継承する日本の皇室は、歴史を通して日本人の道義の中心であり、道徳的理想として大きな存在意義をになってきた。そこで日本人のすぐれた道徳的伝統をさぐるためには、二千年近く存続する日本皇室に継承されている「清明心」や「仁慈の精神」などの道徳性に、まず着目する必要がある。そしてそれを世界諸聖人の思想・道徳と比較考察し、そこに共通一貫する点こそ今後の日本の道徳として注視していくべきであらう。

近年、西洋史家の林健太郎は、世界の君主制を論じた中で、「日本の皇室は独特であって、しかも普遍的なものを持っている最たるものであります」と述べ、日本皇室が普遍的価値を備えていることを強調している。<sup>(8)</sup>

モラロジーでは、日本皇室に継承されている道徳性と世界四聖人の思想・道徳とを、世界の五大道徳系統として着目し、そこに共通一貫する道徳こそ普遍的であり、今後人類にとって不可欠な道徳原理であるとして体系化し、「最高道徳」として提唱しているのである。

注

- (1) 玉城康四郎著『東西思想の根底ににあるもの』講談社、昭和58年。
- (2) 中村元著『慈悲』平楽寺書店、1969年、17頁。
- (3) P. A. ソローキン—W. A. ランデン共著—高橋正己訳『権力とモラル』創文社、昭和38年、208～214頁。細川幹夫「聖人・善人に関する社会学的研究の曙光」(『社会教育資料』第57号、広池学園出版部、昭和44年12月、126頁)。
- (4) 和辻哲郎著『日本倫理思想史上巻』岩波書店、昭和27年、111～112頁。
- (5) 所功著『伊勢の神宮』新人物往来社、昭和48年、50～51頁。
- (6) 『新輯 明治天皇御集 上』明治神宮、昭和39年、649頁。
- (7) 古川哲史「解説」(『和辻哲郎全集』第14巻、岩波書店、昭和37年、404頁)。勝部真長著『日本思想の分水嶺』勁草書房、1978年、20頁。
- (8) 林健太郎著『歴史の精神』実業之日本社、昭和53年、151頁。

## A Study of Modern Thought and Moralogy (Moral Science)

Nobuo Miwa

The purpose of this essay is to investigate the special character of the new moral science, moralogy, which Chikuro Hiroike, LL.D., advocated in 1928 on the basis of his long study and personal practice of morality. The following two points are noted.

Firstly, today there are various schools of thought and movements which are attempting to find ways out of the problems of modern civilization.

I will, therefore, try to inquire into the character and meaning of “Moralogy” contrasted with various schools of thought and movements such as socialism, existentialism, pragmatism, humanism, and activities of the United Nations and UNESCO.

Secondly, Dr Hiroike, in his study of Moralogy, fixed his eyes upon the footprints and philosophies of Jesus Christ, Socrates, Buddha, Confucius and the Japanese Imperial Household, and called the moral principles common and consistent to these saints “Supreme Morality.” He systematized and presented them as the universal moral principles for the future peace and happiness of all human beings.

I will, therefore, try to examine the characteristics found in the philosophies and moralities of those world sages and their meaning for the present age, introducing the points which predecessors have already indicated.